國學院大學学術情報リポジトリ

〔談話室〕國學院雑誌に纏はる噺

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阪本, 是丸, Sakamoto, Koremaru メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000370

國學院雜誌に纏はる噺

阪本是丸

昭和六十二年の春、それまで約十年間在籍してゐた日本文化研究所から文学部神道学科に移籍することになつた。それまでに研究所から学部へ移籍した教員は結構ゐて、同僚だつた故青木周平教授もその一人であつた。

周平さんといへば、すぐに脳裡に浮かぶのが國學院雜誌に纏はる想ひ出である。平成十九年四月に発足した研究開発推進機構に校史・学術資産研究センターが設置された経緯の詳細は省くが、当時、周平さんは國學院の学問を研究する上で、学術雜誌として長い伝統と実績を有する國學院雜誌など本学関係の出版物の調査・研究の重要性を力説してゐた。副学長といふ激職にありながら、研究所の嘱託員・助手のころと変はらぬ、國學院の学問に立脚した研究を遂行しようとする熱意と行動力には「君はすごい！」と思ふしかなかつた。

平成十九年度に選定された文部科学省のオープン・リサーチ・センター整備事業で、「國學院の学術資産に見るモノと心」部門の主任を担当することになつたのも当然といへよう。そんな周平さんの尽力もあつて、今や本学の校史や所蔵する学術資産に関する研究はかつてないほどに盛んになつてゐる。優秀な若手・中堅の研究者もぼちぼちと出てきてゐる。今、古事記学センターの設置による古事記の総合的学際的研究が全学的に推進されてゐるのも、周平さんの幽世からの大きな贈り物と私は勝手に思つてゐる。

國學院雜誌に纏はる小生の想ひ出は研究所時代からいくつもあるが、中でも想ひ出深いのが平成二年に創刊以来通巻一千号となることを記念して特集された「大嘗祭をめぐる諸問題」を担当したことである。春田宣学長の「巻頭言」と三十編の大嘗祭関連論文等が掲載されてゐるが、編集を担当した小生からすれば、いづれの論考も今なほ色褪せない価

値を有してゐると自負してゐる。三十年近くも前のことであるから、寄稿された三十人の先生方の中には他界された方も多くをられる。また、当時は新進気鋭の研究者であつた人たちも、今や錚々たる大家となつてそれぞれの専門分野で活躍されてゐる。今般の「御譲位」のこともあつて、なほのこと感慨も一入である。

しかし、想ひ出噺をして感慨に耽つてばかりゐても仕様がない。少しは古事記に倣つて、「稽古照今」の精神を自己にも培はねばならない。かく自覚はするものの、自己には甘く、他人には厳しくをモットーに生きてきた小生には不似合ひなので、ここでは國學院雑誌の「稽古照今」について聊かの思ひ付きの噺をしてみたい。

前記創刊一千号の「巻頭言」で春田先生は國學院雑誌について「本学の歴史と伝統を織り上げ、さらに社会の公器としての役割りを果たしてきたと自負するものである」と述べてをられる。すなはち、國學院雑誌には「社会の公器」としての役割があると春田先生は断言してをられるのである。「社会の公器」たる國學院雑誌とは一体何を意味してゐるのだらう。微力ながらも校史・学術資産研究センター員として多少は勉強してきたつもりだが、未だによくわからない。そこで、折角の機会だからこの場を借りて私なりの「稽古照今」をしてみることにしたのである。

有体に云つて、戦前の國學院雑誌には「雑誌」としての面白さがあつた。しかし、戦後は主に硬い論考だけが載るやうになつて余り面白味がない。無論、私の独断である。これが独断であるかどうか、その点をしかと検証するのも校史研究には必要ではないのか。何も今更、創刊当初の形態・内容に戻れとは言はない。だが、「発刊の趣旨」にある「国史国文の普及を計」ること、「深くこの学問を研究して、其の新彩を発揮する」こと、この二つの発刊目的がどのやうに「社会の公器」と関はつてゐたのか。そして、今はどうなのか。これを調べるのだ！　尤も、こんな退役間近の老兵の「衝口発」を真剣に相手にする人はゐないに決まつてゐる。だが、もしかして現代の宣長さんが本学に現はれて完膚なきまでに小生の独断を論破してくれるかも知れない。校史研究としての國學院雑誌研究の一層の発展、それを今年歿後十年になる青木周平さんの御霊もきつと願つてゐることだらう。

（神道学）